

オリンポスの娘

畑山 博



オリンポスの娘

オリンポスの娘 奥附

昭和五十四年十二月十五日 第一刷

定 価 一 千 二 百 円

著 者 畑山博 はたやまひろし

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地 郵便番号 一〇二

電話東京 (〇三) 二六五局 一二一一

印刷 精興社 製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次〈オリンポスの娘〉

与那国の母

7

もしかわらしの谷

67

オリンポスの娘

117

あとがき

242

畑山博著書目録

245

収録作品初出誌一覧

246

裴
頓
柄
澤
齊

オリンポスの娘

与那国の母

風が産毛の濃い頬をなぶっている。

ゆねは、じっと遠くを睨んでいる。

海は、老い果てて小波を立てる力も残していないのか、ただ膿色に淀んでいる。沖から吹く風がきょうより強い朝でも、それは変りはしない。

そんな日は、浜近くいる者の眼には、ときおりわずかに小波のはじけるような音を聞くこともあるが、でもそれも、海底の泥土の中から湧き上ってくるもっと濃い膿色のあぶくの群れでしかないのだった。

沖にそれが水平線だろうか、かすかに曇天の裾との境い目のような筋も見えるのだが、でもそれも切れぎれではっきりとはしない。

いつ吹き去ってゆくという当てもない厚雲であった。島人たちは、もう何年も素顔の太陽を見ていなかった。

いや、ひょっとするとそれは、何年などという短い区切り方では語れない遠い以前からのことであったかもしれない。どちらでも同じであった。草の実や岩苔をむしり食うことと嗚咽することの他には、島人たちが唇を動かすことはあまりなかった。語り合うべき言葉がないはずはなかった。しかも人びとはそれを怖れていた。記憶がただ一人びとりの胸の内にとどまり、解き放たれることのない島人たちにとって、つい前の年地毒で死んだ肉親のことを語り出すのさえすでに伝説を語るようにもどかしかった。

島は、周囲六里。昔、まだ四囲の海がはつらつとして飛魚や腹の白い鳥たちの棲んでいたころ、そのころの見張り台のある東崎の岩棚から西崎まで東西に長く、ちょうどはさみをもぎ取られた蟹のような形をしていた。

ゆねとその祖母が立っているこの東南の宇良部の頂からは、北海岸の浜辺を覆うひるぎ林の一本一本を見分けることは出来なかった。が、樹々が海に向かって伸ばしている食欲な根たちの気配はよく分かる。

腐臭を放ち、死に果てたような海にもときおりあるわずかな水の流れに乗って浜辺に漂着する異物があつた。ときにそれは堅い鮫の骨であつたり、無数の小魚の骨が軟化して綿ごみのよ

うになったものであったりした。

そうした骨どもを捕まえようとして根先を網の目状に張り出しているひるぎ林のそのあたりだけ、海の濁りがことさらに濃いのである。

いや違う。ひるぎの樹たちの根先を引きとどめているのは、もしかするとあの沼のような海の方なのかもしれない。ひるぎたちは、海の餌食になるまいとして耐えているのかもしれない。枝も幹もみな島の頂の方に向かって傾いている。浜近いひるぎの群落ばかりではない。もっと内側の斜面に生えているガジュマルの群落も、あだんの林も、地縛り草の繁みも、頂に向けて傾いている。ちょうど、鋤をかついだ人間たちが斜面を這い上ろうとしているように。

でも、そんな樹林や草々の繁みも、ついにこの頂までは登りきれないのだ。途中で力つきて這いつくばり、砂岩の岩肌に抑えこまれてしまうのだ。

這い登ろうとする樹や草々を睥睨してそびえている岩場にも、しかし黒緑色の岩苔だけは生えている。岩の亀裂や凹みの部分に細い帯状に付着しているそれは、指を差し入れてみると小指が隠れるほど深い。そんな苔が、ところどころ崩れ崖の砂礫層に遮られながらも、どうやらずっと山頂にまで這い上っているのである。

ゆねといじゅは、その岩苔を噛みにきたのだった。

樹液染めの短衣の裾はもとと膝上までしかないのに、幼いゆねは、まくって腰縄にはさん

でいた。ざんばら髪も、あちこちすり傷だらけの四肢も短衣の色も、あたりの岩場の色と変らなかつた。そんな中で、ゆねの樹の葉で編んだ細い腰縄だけが、まだ青々とした草の色を残していた。

立っているゆねの背丈は、背の曲った祖母の腋の下ほどの高さしかなかった。それだから、ゆねがいじゅうに向かつて何か話すときは、爪先立ちをし、肩につかまるようにして叫んでやらなければならなかつた。

土色の頭皮がすけて見えるほど少ない毛であつた。でもその白髪は異常に長く、額に二巻きも出来るのだった。額に巻いたその髪を、いじゅうは枯草で結んでいた。裸足のいじゅうが頬ばっている岩苔は、ぼろぼろに崩れて唇の端からこぼれていた。樹の皮のひびのような割れ目のついた乾いた薄い唇だった。

厚い下唇の上に白い歯を覗かせたゆねは、裸足の足裏でしきりにもう片方の足首をかいてゐる。少女らしく少し熱過ぎる唾液をあふれるほどに滲み出させながら嚙んでいる岩苔だった。それなのに、いつまでも岩苔は、ねばつくことなく乾いていた。

島の頂に近い岩場の苔は、いつだってそうなのだ。苔がしがみついている岩肌にはもうどんな養分も残ってはいなかつた。指先でつまみ、ほんの少し揺するようにしてやるだけで剝がれてしまう虚弱な苔であつた。

それなのに、なお島人たちが宇良部の苔を噛みにやってくるのは、苔の群生が含んでいる水分の量を確かめたためだった。

島には、ごくたまに長くて半日ていどの雨が降るだけだった。砂岩の熱い岩肌は、たちまちそれを蒸発させてしまう。ただ岩苔だけが、身に含まきれない水分を根方に貯め、少しずつ下方へ押し流してくれる。

島の頂から幾百筋もの細い岩の窪みを通り、苔の道が下っている。

その苔の道は、途中崖崩れに遮られたり地縛り草の繁みの根に脅かされながらも幾筋か合流し合い、斜面を流れ下って行く。

そうしてその流れの裾が、もうすぐ食欲なガジュマルの樹林帯に捕えこまれそうになる直前に、島人たちの耕す段々田が連なっているのだった。

口の中の苦い岩苔を、まだゆねは噛んでいる。

いじゅは、片手を膝について屈んだまま、まだ苔の道を見つめている。

何十人ともされない島人たちが上ってきて、むしり取り、あるいはてのひらで押ししぼっていった跡が、枯草色の濃いまだら模様を残している苔の群落であった。

いじゅが、背をさらに曲げて屈みこんだ。そのいじゅの動作があまりにゆっくりとして周囲の大ぶりの岩場の景色になじんでいたものだから、いじゅはもうそのままそこから立ち上らな

いつもりなのだろうか、ふと、ゆねは思った。

「まだ歩かんと行かれんのじゃい」

ゆねは言った。

いじゅは、片膝を立てたまま片方の脚を地べたに横たえ、岩苔をなでていた。

「動かんかい。いじゅ」

足踏みしてみせながらゆねは言った。背を向けたまま、いじゅはふり返らなかった。

でも、ゆねは知っている。そんないじゅの頑なさもほんの一時でしかないことを。やがていじゅは膝の骨を樹の芯がひび割れるときのように鳴らして立ち上る。立ち上りゆっくりとまた歩き出す。歩きだす以外にもう行く場所はないのだった。

「こ……」

背を向けたまま、いじゅが言い、しゃがんだときよりもっとのろのろと腰を上げた。

踵からふくらはぎにかけて大きな裂き傷のあるいじゅが、よろけながら下る砂礫の層を、ゆねは、跳ぶようにしてついて行った。ゆねの母親を生んだころだという。地毒の跡がそのまま残ったいじゅの乳房は、萎びた細い二本の木のつるみたいに垂れていた。

いじゅよりは脛も腿もずっと太いの、ゆねの足の甲だけが、祖母よりも一回り小さかった。その小さいゆねの足跡が右足の踵だけやけに深く、足先は指の見分けもつかないほど浅い

もの癖を印しながら下って行く。

最初の岩棚の鼻を曲ると眼下に按司屋敷あんじを包むガジュマル林がひろがった。人間たちのてのひらのように厚い葉を繁らせているガジュマル林は、百メートルを越す断崖の直下からずっと海浜まで、ゆるい斜面の上をびっしり覆っているのだった。

ほんとうは、島の地形からいうと、このあたりこそ人びとが田を拓くには最適な土地であった。それなのに、ガジュマルどもはてんでに枝を絡め合い、てんでに自分の樹皮の中に隣の枝を包みこんでしまおうと闘い合って茂っている。その根も、子どもの背丈より高い幹の途中から脇に突き出し、鋭く砂岩層を穿って地中に食いこんでいた。

地の下もまた根と根が絡み、固い岩盤のようになって、鋏の刃を受けつけない大密林であった。

樹林の下土は、地縛り草さえ生えない砂地だった。たまに降る雨は葉や幹たちが全て吸いこみ、しずくの一たれさえもこぼさなかった。

そんな樹林帯のずっと向こうに祖納そなえの間切まぎりの屋根屋根が遠く見えた。

集落の屋根屋根は見えるのだが、でもそこに棲む人びとの耕す段々田はここからは見えない。苔の道が行きつく先の耕地は、茂り過ぎたガジュマル林の中に、ひっそりと隠れるように包みこまれているわずかな一画でしかないのである。

島に生まれ、生きつごととする者たちの十人に一人だって養いきれない乏しい田であった。片手を伸ばし、力いっぱい苔を圧しつけながら、ゆねは歩いていった。二人の歩いている急斜面にも、岩の裂け目をぬうようにして苔の道はつづいているのだった。

ガジュマル林に巣を作る鬼蟻の他には島にはとうにいらなくなってしまった鳥や獣たちの遺した骨？ それとも礫？ もうそんな見分けさえつかなくなっているがれ場を下るときも、いじゅは黙りつづけていた。

ときどき尻を地べたにつき、肱で岩肌をこじるようにして、いじゅは進んだ。枯死したガジュマルの幹だけが砂地に突き立っている白骨森を抜け、また一つ岩棚の鼻を回ると、ふいに眼の下に人舛田とんぐだが見えはじめた。

宇良部山の頂は島の東南の方に寄っているので、島の東部の中央は、山の北斜面の途中にある。そこに周囲一面の地縛り草の草地を拓いて真四角な囲いを築き、底を平らな砂岩で固めた人舛田があった。

何年かに一度、按司屋敷の郎党が吹く生き死にの境いの骨笛が鳴るたびに、島人たちが先を争って駆けつけてくる人舛田。それは、ここから見ると、ゆねが両腕で作った輪の中にすっぽり収まってしまいそうに小さく見える。

ふいに、いじゅが短い叫び声をあげて岩角から足を踏みすべらせた。砂煙を上げ、肱を下に